

中之島フェスティバルタワーへ(2)

歴史を継承した新しい響き

中之島フェスティバルタワーの「フェスティバル」は、いうまでもなくフェスティバルホールに由来する。「天井から音が降ってくる」と賞賛された名ホールの音響特性を引き継ぐべく、新ホールの建設には国内

外で数多くの音づくりを手がけてきた永田音響設計をはじめ、多くの専門家たちが関わっている。その中から、ホールを設計した日建設計の江副敏史氏に話を聞いた。

小学生の頃、豊中市に暮らしていた江副氏が、生まれて初めてクラシック音楽を体験したのがフェスティバルホールだった。朝比奈隆指揮による、大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏会だったという。朝日ビルの名物レストランであるアラスカにも、何度が連れてもらったそうだ。その後クラシック音楽を愛好するようになり、建築設計の道を選んだ江副氏にとって、フェスティバルホールと大きなアールを描く朝日のビルは、特別な記憶として残っているという。

日建設計に入社してから、江副氏は



精密に造り込まれた10分の1のホール模型。舞台上から信号音を発して反響を確認する実験などが重ねられた。

都市美を伝えて

朝日新聞と中之島の130年

取材支 高岡伸一

数多くの音楽ホールを設計してきた。神戸国際会館や岸和田市立浪切ホール、2005年に完成した兵庫県立芸術文化センターも担当した。オフィスにも近いフェスティバルホールの公演に通ううち、いつしかこのホールを設計してみたいという思いを抱くようになってきたという。そして日建設計がコンペを勝ち取る。

「子供の頃からの想いが実った」と江副氏は語るが、何という巡りあわせだろうか。

関西の音楽ファンにとって、このホールは特別な場所だ。設計に際しては、できるだけ旧ホールのイメージを踏襲することを心がけた。2700席の規模、壁と天井の形状、客席の赤い色など、全体の雰囲気やデザインは旧ホールを引き継いだ。その上で2層だった客席を3層に変更し、天井からの反射音が客席奥まで届くようにした。客席部分のホールの幅を縮めて見やすさと聴きやすさをさらに高めた。

優れた音楽ホールとして知られたフェスティバルホールだが、課題がなか

ったわけではない。オペラやバレエ公演など近年大型化するセットにも対応できるように舞台を広げ、逆に間口は催し物のタイプに合わせて可変で縮められるようにした。何よりこだわったのが、「静けさ」だ。ビルの前の道路には後から地下鉄四つ橋線が建設され、実は旧ホールには地下鉄の振動がわずかではあるが伝わっていたのだ。そこで新ホールでは床・壁・天井を全て2重とした浮き構造を採用し、間に防振ゴムを挟んで外部の振動をシャットアウトした。これほど大規模なホールの浮き構造は珍しいという。豊かな音の響きに加えて、完璧な静寂をも実現したホールなのだ。

現在ホール内部の工事は最後の段階を迎えている。最終的にはオーケストラを入れて、音響をチェックしていくという。



提供／株式会社朝日ビルディング
<http://www.festivaltower.jp/>

中之島フェスティバルタワー

